

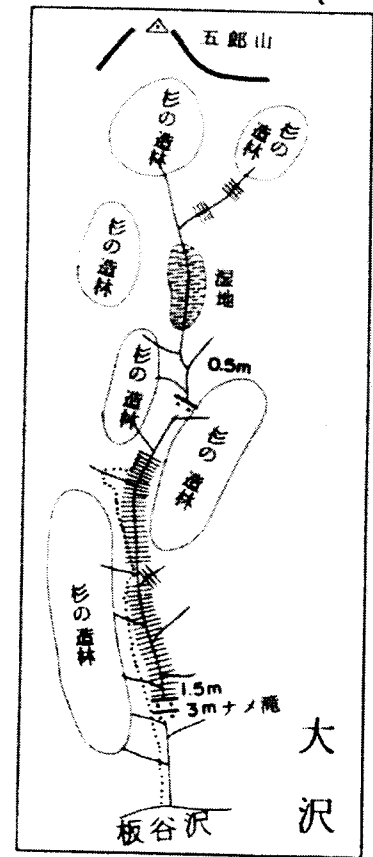
ある。水が溜れた所で沢から上がり、造林地の中を一分程のヤブコギで尾根に出る。

(記・タム)

「タイム」 大沢出

合(一一・四五)↓林道終点(一二・二〇)↓二俣(二三・〇五)↓尾根

(一二三・二五)

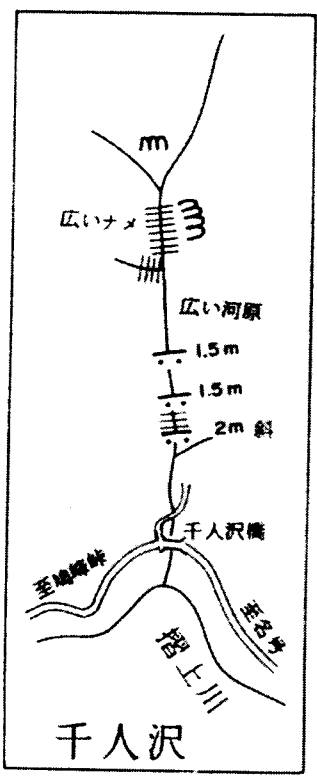


千人沢

一九八五年七月二日

仕事を終えて出発。目的の千人沢は、後沢にかかる落合橋のひとつ手前の沢である。橋に千人沢と書いてあるので、間違うことはない。しかし、あまりにも小さな沢である。橋を降りて遡行を開始するが、す

ぐに林道が横切り、沢はヒューム管の中に入ってしまう。しかたなく林道に上がり沢をさがすが、幅一桁程のこの沢は、刈り払いした



枝の下で歩けるものでない。ヤブをこぎながら登ってゆくと、ようやく広い河原に出た。一部伏流となり、至る所にクマかカモシカの大きな足跡が残っていて、気分の良い沢ではない。

顕著な二俣を右に入り、稜線が見えてきた所で、ヤブもひどいので遡行終了とした。二俣手前のだいたい色の広いナメがこの沢唯一の収穫。沢登りの対象としてはあまりにもおそまつである。(記)

「タイム」 千人沢橋(一二三・五〇)↓ 遡行終了(一二四・二〇)